

<http://ncbungaku2013.web.fc2.com/>

日・中文学翻訳館／趙清閣 #SE-1



1966年8月24日、北京の太平湖に身を投げて、老舎が自らの命を絶った。それから33年後、上海で趙清閣という名の女性が静かに息を引きとった。享年85歳だった。

2001年5月21日には老舎の妻、胡絮青が96歳の大往生を遂げた。老舎の人生に深く関わる二人の女性が亡くなったあと、それまで関係者しか知らなかった事実が公にされ、中国のネット上ではさまざまな意見が飛び交った。

老舎の「愛人」という噂を立てられたがゆえに不当にその文学的価値を無視されてきた趙清閣だったが、現在では彼女が文芸誌の編集長として多くの作家や詩人たちと関わっていたことで時代の証人として脚光を浴び、彼女自身の著作も復刻されて評価を受けるようになってきた。彼女は最後まで老舎を想いつづけ、老舎も力尽きて自ら命を絶つまで彼女のことを想い、心の支えとして生きた。

## 落葉、無限の愁い

趙清閣

(訳 萩田麗子)

勝利（1945年の第二次大戦の終結を指す）は人々に希望をもたらし、絶望をもたらした。

勝利を夜明けになぞらえた人々は、その後には暗い夜が来るのだということを忘れてしまった。ふだんは厳粛で沈うつな表情をしている邵環(シャオホアン)教授も、勝利のその日、なんと朗らかな明るい顔を見せた。何歳も若返ったように、学生時代に戻ったように、いつもはあまり整えていない口ひげを剃り、すばらしく情熱的な一通の手紙を書いて焮(ツァン)に送った。彼は彼女に告げた。「すべてにとっての新しい人生が始まる。特に我々の愛は新しく生まれるのだ！」

だが1か月後、彼が得た返答は新生とは真逆の破滅だった。彼女はひっそりと去ってしまった。

「新しく生まれるのはあなたたちで、私たちではありません！ だから本当の新生を求めようとするなら、最初にすべての古いものの痕跡を消さなければなりません。そのために私は

黙ってあなたから離れたのです。私のことを忘れさせるために。そうしてはじめて別の人を愛することができるのです。私たちの過去を忘れて、はじめてあなたたちの未来を復活させることができるのです。私が去ったことであなたが悲しむことを望んでいません。でも私たちがまた会うことは、もっと望んでいません。あの詩のような、夢のような私たちの恋を終わりにしましょう。天上界でも人間界でも、終わらない宴なんかどこにもないのです。」

邵環は震えながらその手紙を一字一字読んだ。高い空から底なしの深い割れ目に落ちてしまったようだった。彼は茫然として首を振り、体を揺らした。意識はほとんどなくなりかけていた！ 悲しみでもなく恨みでもなく、ただ不安と怯えを感じた！ 三日三晩、邵環は前のような平静さを取りもどすことができなかつたし、もう以前のようにいろいろなことを周到に、如才なく考えることができなくなっていた。

一つの直観的な概念が彼を支配していた。その概念は彼の正常を失わせ発狂させ、名誉と地位を顧みる余裕も、妻が起こす騒ぎ、子供たちの悲しみを顧みる余裕も失わせた。この概念は至高の愛であり、神の力を超えるある種の最高に気高い魂の愛だ！ それは一陣の清らかな風のように現実生活の中に存在する紛争を吹き散らし、流れる水のように、彼をしばしば悩ませている理性の中にある矛盾を薄めてくれ、長いあいだ埋葬されていた情熱に火を付け、彼に勇気を与え、詩の境地に、夢のような宇宙に導いてくれた。

四日目の晩、邵環(シャオホアン)は大学に辞表を出し、帰宅し、給料をすべて妻に渡し、何も言わずにすぐに眠った。夜明け前にそっと起き上がり、ぐっすり眠っていた二人の子どもにちょっとキスして、厳しい顔付きをしている妻のほうは見ようとしなかった。抜き足差し足で玄関を出た。八年間、枷(かせ)のように自分を閉じこめていた中庭から外に出た。数十段のでこぼこした石段の露地を抜けた。くねくねと曲がって流れる嘉陵江を越えた。重慶を出た、霧の中から抜け出た！

飛行機が上昇するにつれて、邵環は身も心も空高く飛翔した。彼ははじめて、自分が飄々と軽快に流れていく雲になったように感じた。40年あまり生きてきた中で、突然、世俗を脱して昇華を果たし、細長く立ち上る煙と化したように感じた！ 上から見下ろす山や川、樹木、街や村、群衆、すべては小さくてとても哀れだ。ただ愛だけが偉大だ！ 愛は聖なるものだ！ 愛はダチョウにもなれるし鳳凰にもなれる。愛は彼を載せて楽園に運んでくれることもできるし天国に運んでもくれる！

彼はわずかも後ろに残る景色を振り返って見ることはなかった。彼の目はきらきらと輝き前方の美しい雲をしっかりと見つめ、視線は雲の上に現れている美しい魂に注がれていた！

どれだけ多くの嶺を飛び越え、大小の川を越えたことだろう、ついに夕暮れどき、飛行機は高層ビルのジャングルの中に下りた。旅の道連れたちは上海に着いたとき歓呼の声を上げた。邵環は、この取り戻した自由の土地に、旅の道連れたちと共に足を踏み入れた！

彼は着古したラシャの長衣をまとい、わずかなお金と講義の原稿、小さな住所録の入った皮のカバンだけを抱えていた。住所録から以前、灿(ツァン)が教えてくれていた元の住所を探し出し、林森路に向かっている人力車を雇って復興路に走らせ、そして陝西路に走らせた。だがどうしても「亨利路、亨利公園三十三番地」に行きつかなかつた。彼は車夫が彼に意地

悪をしているのではないかと思い、人力車を下りて一人で尋ね歩くことにした。聞けば聞くほどわからなくなってきた。彼は土地の人が何を言っているか理解できなかつたし、土地の人も彼が何を言っているのかわからなかつた。

空がだんだん暗くなってきて騒音の激しい大通りをあちらこちらとうろついているうちに、心配で気が気でなくなった。突然、北部の地方の訛りのある警察官を見つけ、彼に尋ねてやっと、元の道路の名称が全部変わっていることがわかつた。亨利花園は杜美路の東の端の角にあった。

これでやっと彼は元気を取り戻し、ネオンの明かりを頼りにまた探しはじめ、まさに「踏破鉄鞋無覓処、得來全不費工夫①」で、何回か曲がったあとすぐに亨利公園が目の前に現れた。邵環は三十三番地の門の外に止まり、まず自分を落ち着かせて、それから呼び鈴を丁寧に押した。一回、二回、三回、四回……何も返事がなかつた。その高いビルを見上げた。黒くて光のない木々が、寺院の前にふらふらとたたずんでいる幽霊のように見えた。

そのとき一陣の秋風が吹いて葉を吹き落とし、彼の顔を打った。彼は思わずびくっとした。引越したのだろうか？ だが焔(ツァン)はこの家は自分のものだと言っていた。絶対に移るはずはない。もう寝たのだろうか？ だが以前は12時前に休む習慣はなかつた。それでは外出しているに違いない、と考えて、彼はまた安心した。

この時間を利用して彼は宿を見つけ、簡単に夕食をすませてベッドに横になり、腕時計を見ていた。一度恐ろしい疑念が浮かんできた。「彼女は別のところに行ってしまったのではないだろうか。」だが少し冷静になり、すぐにそれを否定した。彼女が以前、「勝利したらまず、八年別れていた家に帰らなければならない」と宣言するかのようには言っていたことを覚えていた。だから間違いなく上海にいると判断した。

一時間、そしてまた一時間が過ぎていった。邵環(シャオホアン)は二度、三度と亨利公園に行った。建物の明かりはまだ点いていなかった。夜が更けた。秋風は強くなり通りの通行人も少なくなり、ただ落葉がかさかさ音と立てて舞っていた！

彼はがまんできなくなつて呼び鈴を鳴らしつづけた。焔(ツァン)の名前を呼びつづけた。彼の声はときにははっきりと、ときにはかすれ、ときに平静を保ちときには震えていた。深い谷間に響く咆哮のような声、うっそうとした森にいる鷹のような声、孤独で悲しげに鳴く雁のような声、鳴いて血を吐くほととぎすのような声で……「焔！ 焔！ 焔！ 焔！」

その声は天に届き、夜空に響き、果てしないコンクリートの原野に響きわたった！ 砂漠をヒューヒューという音を立てながら吹き渡る北西の風のようにこだました。月が出て月が沈むまでこだましていた！

その夜、亨利教会の鐘は鳴り止まないようだった。物寂しい秋風の旋律の中に、悲しげに途切れ途切れに鳴っていた。その音が何度か眠っている病人を起こした。彼女は何度か体を起こし耳をそばだてた。そしていぶかしげに窓の外を見た。月を見た。枕元の MARIA 像を見た。

「MARIA 様、だれが私を呼んでいるのでしょうか！ だれが私を呼んでいるのでしょうか！」病人はぶつぶつと独り言を言った。そばで看病していた老人は驚いて、不安げに病人をふとんの中に寝かせ付け、その頬にキスしながら安心させた。

「よくお眠り、お前。誰も呼んじゃいないよ。」

「いいえ、私には聞こえるのよ。だれかが遠くにいて、そしてすぐ近くから私の名前を呼んでいるみたいに。信じられないなら聞いてみて、お父さん」

老人は困惑しながらも耳をそばだててじっと空中の音を聞いた。「聞こえないよ。あれは教会の鐘の音じゃないか。お前、聞き間違えたんだよ。」

「お父さんが聞き間違えているのよ。人の声よ、灿(ツァン)！って言ってるの。もう一度ちゃんと聞いて！」

灿はそう言い張って、窓を開けて見て確かめさせた。老人は娘が熱でうなされているのではないかと思い、急いで医者を呼んで睡眠薬を飲ませ、眠りにつかせた。

翌朝、灿が目を開けると、ベッドの横に立っているよく見知った人物の姿が目に入った。彼女は驚き、それから目をこすり、またじっと見つめた。「灿！」 昨晚聞いた呼び声だ！ 灿は突然笑いだし、その人物を両手でつかんだ。目には涙が光っていた。

「灿、君を捜すのにどんなに苦労したか！ 歩き回って足は折れそうだったし、叫びつづけて声は枯れそうになった。」

「聞こえた！ 聞こえたわ！」 灿は狂ったように握りしめている彼の手に口づけをした。

「聞こえたって？ 家にいなかったんじゃないのかい？」

「ええ、ここで聞いたのよ。家からあまり離れていないでしょう。じゃなかったら、マリア様があなたの声を風に乗せて届けてくれたのよ。何度も夢の中であなたに起こされたの。お父さんに言ったんだけど信じてくれなかった！ ああ、お父さん、もう信じてくれるでしょう？ この人が私を呼んでいたのよ。」

灿は老人に勝利の笑顔を向けた。「お前の言う通りだ。家に帰ったとき邵(シャオ)さんがお前のことを呼んでいた。一晩中呼び続けていたそうだ。」

「本当なの？ それじゃ一晩中寝てないの？」

『一晩？』そんなもんじゃないよ。君が行ってしまったあと、ぼくは何日も眠っていない！」 邵環(シャオホアン)はベッドのわきに座った。顔に浮かんだ喜びの表情は疲労に覆われていた。だが興奮してしゃべりつづけた。「とうとう君を捜しだした。捜しだしたぞ！」

「いつ上海に来たの？」

「昨日の午後だ」

「家の人は知ってるの？」

「みんなには言ってない。」

「どうして？」

「もういろんなことを気にしなくなったんだ！」

「勇敢なのね！」

「愛の力さ！」 彼らは抱き合った！ 心が心に寄り添い魂が魂に口づけをした。老人はそっと出ていき、感動の深いためいきをついた。

「病氣してたんだね？」

「ええ。あなたと別れてからの苦しみと、お父さんに会ったときの喜びの差が大きくて、それに体が耐えられなかったのね、きっと。上海についてすぐに倒れてしまって、治療に便利

なようにと、お父さんが教会の病院に入れてくれたの！ ほら、もう良くなっているのよ。明日には起き上がるわ！」 灿(ツァン)はそう言いながら元気よく手で、乱れていた長い髪を両側に梳いた。

「いつまでも君が健康でいられますように。いつまでも雪山の紅梅のように気高く芳しくいられますように！」 彼はうっとりとしたようにつぶやいた。

「あなたがいつまでも若くいられますように、いつまでも紅梅のそばの緑の竹のように強く優雅でありますように！」 彼女のほほに暖かい微笑みが浮かんだ。

二十日間あまりの黄昏どき、プラタナスの落葉が敷き詰められたマルクス南路の上を、いつもそぞろ歩いているカップルの姿が見かけられた。男性は濃紺のスーツを着て、女性はえび茶色のチャイナドレスに身を包んでいた。月明りの夜には、まるで雪の光のように大地が銀色に照らされ、紅梅のひと枝が一本の緑の竹によりかかるような、一副の美しい自然の冬景色の図ができあがっていた。

「本当に元気になったね。」

「あなたも本当に若返ったわ。」

彼らは互いに褒め合い、落葉を踏みながら晩秋の斜陽の中を散策していた。とつぜん灿が何かを思い出したように、プラタナスの並木の端で立ち止まった。

「でも、私はいつも心配なの。ある日私がまた病気になりかける、あなたがまた年を取りはじめるって」

「どうしてだい？」 邵環(シャオホアン)は疑わしそうな視線を向けた。

「いろいろなことが私の健康を傷つけるだろうし、あなたの若さを妨害している細菌もまだあるし、まさにいま蔓延しているところなのよ。」 灿の声には少し憂いの響きがあった。

「そんなにいろいろ考えちゃいけないよ！ とにかくぼくはすべてを捨てるって決めたんだ、出てくるときに。教授の招聘書は学校に戻したし辞表も出した。給料はぜんぶ家に置いてきた。それに今までに集めた本も故郷にある遺産の証文もすべて妻の手の中にある。彼女と子供の生活には何の問題もないと見積もった。彼らは故郷に戻って安心して暮らせる。ぼくはもう彼らに対する義務は果たしている。」 彼はきっぱりと言った。もうじゅうぶんに考えていると言わんばかりだった。

「あなたはそれで問題が解決すると思ってるの？ それで彼らを捨てられると思ってるの？ 彼らがあなたをあきらめると思うの？ できるはずないわ。彼らは何も要らないの、ただあなたを必要としているのよ。彼らがやすやすと妻や子供の権利を捨てるはずはない。本も祖先の財産も彼らを満足させることはできない。正式に『あなたは永遠に彼らのものではない』としない限り、実際にはあなたは永遠に、彼らのために責任をとらなければならないのよ。」

「ぼくは彼らに自分を売ってはいないよ。」 邵環は不服そうに反駁した。

「でも法律上は売ったことになってるのよ。」

「法律の仕事は人が幸せになるのを助けることだろう。ぼくは妻を愛してはいない。法律は永遠に苦しみ続けることを強制できない。」

「法律は離婚することを許可しているわよ。」

「彼女がうんと言わないんだ。彼女はぼくを脅して養育料を取ろうとしたが、ぼくには金がない。」

「ほら、もう目の前で不幸が発生しようとしている！」

「ぼくはそんなことは考えたくない。どこか遠くに逃げて静かな場所を見つけ、僕は本を書く。君は絵を描き、清風を友とし名月を伴と成す。たとえ天災地変が起ころうと、我々の愛は永遠に生きる！」

「ある日あなたの理性が目覚めたら、きっと後悔することになるわ」

「どうして君はぼくを信用してくれないんだ？」

「だって中年の男性の感情は本質的には損か得かで動く如才ないものだからよ。たまに純粋な無邪気な純粋な気持ちも起こるけど、長続きはしない！ 奥さんを愛していないといっても、子供は絶対に愛しているはずよ」

「そんなことは言わないでくれ。わかっているんだよ、後悔するのはぼくではない、君だ！ 君はぼくのために自分の名誉を犠牲にはできない。君の地位、君の青春も！ 君には理想的な幸せな結婚が必要だ。ぼくと一緒にいること、それを君は恥だと、不義密通だと思っている。だから君は矛盾しているんだ。」

「否定はしないわ、私は矛盾している。でも、この矛盾はあなたが思っているほど単純じゃないの。この矛盾は、感情と理性の矛盾なの。利己主義と道徳とが複雑に絡み合っているのよ。私はこの矛盾した心理を克服することができるけど、あなたがその矛盾した現実を克服できるとは限らない。だって、私たちは現実の中に生きているの。現実はいつも私たちを苦しめている！ 私たちが一緒に大きな川を跳びこえない限り、私たちは現実から逃れ、矛盾を克服することはできないのよ」

「……」邵環(シャオホアン)はもう何も言わなかった。彼の心は沈む太陽とともに沈んでいった。落葉が足をたたき、彼には一つ一つの石が自分の行く道をさえぎっているように感じられた。彼は交差点のところでためらい立ち止まった。自分はどうしたらいいのだろうか？

こぬか雨の降るある朝、彼は、妻から来たという電報を友人から手渡された。それには「明日、上海着」、とあった。それを見て、重慶を離れたときと同じように彼は何も考えず、すぐに灿(ツァン)のもとにやって来た。

「『うん』と言ってくれ。明日いっしょに上海を離れよう！」と邵環は独断で決めていた。

「どこに行くの？」

「最初に北京に、それからぼくたちは、広い天空の旅を続けるんだ。」

「……」彼女は何も言わなかった。邵環の表情から、予測していた不幸がやってきたことを理解した。

「つまり、ぼくは飛行機のチケットを買いにいってことだよ。夕方に来るからね。」邵環はぐずぐずしてはいられないと言わんばかりに、すぐに出ていった。彼女もためらわずに、黙って自分の行く道を定めた。

また秋風が物寂しく吹きわたり、静かな夜がきた。孤独になった雁は哀れな鳴き声を上げたが、それに応じる鳴き声は返ってこなかった。ホトトギスは血を吐いて空しく一人で悲しみ、恨んだ。邵環(シャオホアン)が立っている暗い建物の部屋の前は鎖で閉められ、愛の神の涙を象徴するような細かな雨が降っていた。「灿(ツァン)! 灿! 灿! 灿!」

マリア像は暗く沈んだままだった。教会の鐘が悲しく答えた。「彼女はもう去ってしまったのさ! 大自然の果てに向かい、春の便りを求め、自分の命を限りない至高の芸術に捧げたのだよ!」

「灿!」彼はぬかるみに倒れこんだ。落葉が静かに、彼の魂を埋葬した。

中華民國 36 年 (1947 年) の春 上海にて

① 踏破鉄鞋無覓処, 得来全不費工夫……鉄の鞋を履き潰すほど探したものが、まったく時間をかけずに手に入ること。捜し物は捜す時にはないものだ、という意味で使われる成語。

(『書信世界里的趙清閣与老舍』復旦大学出版社, 上海市, 2012, pp. 106-112.)



(中国語原文)

## 落叶无限愁

赵清阁

胜利给人们带来了希望, 也带来了绝望!

把胜利比作天亮的人们, 却忘了紧跟着还有一个漫漫的黑夜! 从来严肃而又沉郁的邵环教授, 胜利这天居然也轻松快活了一次! 他像年青了许多, 他像回到了大学生的时代, 他把唇上的一撮不大修饰的小胡子剃了, 他写了一封很美很热情的信给灿, 他告诉她: 一切的一切都该开始新生了! 尤其是他们的爱情。

但是一个月以后, 邵环得到的回答是与“新生”背道而驰的毁灭——她已经悄悄地走了。

“应该新生的是你们, 不是我们!” “所以你要追求真正的新生, 必须先把所有旧的陈迹消除了。” “为了这, 我决定悄悄地离开你, 使你忘了我, 才能爱别人, 忘了我们的过去, 才能复兴你们的未来!” “我不希望你因为我的走而悲伤, 更不希望我们会再见。” “就这么诗一般, 梦一般地结束了我们的爱情吧: 天上人间, 没有个不散的筵席!” 邵环哆嗦着一字一字地念完这封信: 他宛如从万丈的高空坠落到无底的深渊! 他茫然地晃了晃脑袋摇了摇身子, 他意识到他已经死了一半! 没有悲伤, 没有恨, 只是惶惑与心悸!

三天三夜, 邵环不能恢复他以往的平静, 他不再像从前想得那么多; 那么周到; 那么世故了; 一个直觉的概念支配了他, 使他失常; 使他发狂; 使他不暇顾及名誉地位; 不暇顾及妻的吵闹; 和孩子们的哀! 这概念便是至尊的爱, 一种超过了上帝的力量, 至尊的靈魂的爱! 它仿佛一股清风, 吹散了千头万绪的现实生活中的纠纷; 又仿佛一溪流水, 冲淡了常常苦恼着他的那些理性上的矛盾; 更仿佛一枝火炬, 燃烧起埋葬了许久的热情, 而导引着勇敢的他迈向诗一般境界; 梦一般的宇宙!

第四天的晚上，邵环向学校上了辞呈，回到家，把所有的薪金交给妻，不言语，纳头便睡。黎明之前，他轻轻地爬起来，只吻了吻酣寐中的两个孩子，连看也不看一眼有着一副凶悍面孔的妻。蹑手蹑脚走出房门；走出关闭了八载的枷似的天井；走出数十级石坡坎坷的巷子；走出蜿蜒如带的嘉陵江；走出重庆；走出雾！

邵环的身心随着飞机遨翔于高空，他第一次感到犹如行云那么轻快；那么飘逸；活了四十余年的生命，遽然得着一种升华的超脱，化为袅袅青烟！俯瞰地面的山，水，树木，城镇，人群，都渺小得可怜，而只有爱是伟大的！爱是神圣的！爱能变成鸵鸟！变成凤凰；爱能把他驮向乐园，驮向天国！

他不屑于再回顾一眼那留在后边的景物，他的一双眸子放光地直注射着前方一块光朵似的彩霞，彩霞上幻现出一个美丽的灵魂！不记得翻过了多少峻岭；渡过了多少大川；终于，暮色苍茫中飞机停落在高楼大厦的丛林里，旅伴们欢呼看到了上海，邵环盲目地跟着旅伴们踏进这恢复了自由的土地上！

除了身上穿的一件破旧的呢夹袍以外，只带着一只皮包，里面有极少的零用钱，和些讲义稿子，一本小小的“亲友簿”。邵环在亲友簿上面查出以前灿写给他的永久通讯处，他按着地址雇了一部人力车驶向林森路，驶向复兴路；驶向陕西路，但怎样也找不到亨利路亨利花园三十三号。他怕是车夫故意捉弄他，便开消了车子，一个人徒步边走边问着。谁知越问越糊涂，他不懂别人的话，别人也不懂他的话。渐渐天黑了，他行于烦嚣的马路上，他的心开始忐忑了！

忽然他发现一位北方口音的警察，于是才打听明白原来路名全改了，亨利花园就在杜美路的东首拐角处。这么一来，他怀着兴奋的精神，借了霓虹灯的光辉，重新又去寻访了，真的，“踏破铁鞋无觅处，得来全不费工夫”，几个转弯，亨利花园便显现到面前。邵环停在三十三号的门外伫立了一会儿，尽力先让自己镇定，然后郑重地去按着电铃。一次；二次；三次；四次……都没有回音。他连忙抬头眺望这幢孤立而高大的楼房，黑暗无光，一株株树木，宛如一个个幽灵蹒跚在一座寺院前。

这时一阵秋风，吹落了几片叶子，打在他的脸上，他不禁悚然惶恐起来！“搬家了吗？可是，灿告诉过他：这宅子是他自己的，绝不可能迁移。已经睡觉了吗？但从来没有十二点以前安憩的习惯。那么，就是出去应酬了。”这样想，他又平安了！他便利用这个时间去找了一家旅馆，草草地吃了一顿晚餐，躺在床上呆呆地看着表。曾经有个可怕疑虑闪进脑海，他猜：灿会不会到别处去了呢？他沉思了一会儿，又很快否认了，他记得灿有一次向他发誓地说：“一旦胜利，第一件事必须要回到八年阔别的家。”因此，他判断灿绝对在上海。一点钟一点钟地过去了，邵环一次两次地再访亨利花园，楼房照旧没有灯。

夜深了，秋风更紧，马路上行人稀少，只落叶杀杀地飞扬着！他再也不能忍耐了，他不断地按电铃；不住地喊着灿的名字；他的声音由清脆而涩哑；由平静而颤栗；像深谷里的狮吼；像幽林中的鹰叫；像孤鸿哀鸣；像杜鹃啼血……“灿！灿！灿！灿！”

响彻云霄；响彻夜空；响彻无边际的原野！宛如沙漠里西北风的哨子，回荡着；回荡着，从月出，到月落！



这一夜亨利教堂的钟声仿佛没停止过，在萧瑟的秋风旋律里凄切地断续铿锵着！几次把昏睡中的病人从梦乡唤醒，几次她抬起了身子；耸起了耳朵；疑问地凝视窗外；凝视明月；凝视床头的圣母像！“圣母，是谁在叫我哩！是谁在叫我哩！”病人喃喃自语着。

惊动了一旁看护的老人，忧惧地连忙把病人按到被子里，一边吻吻她的额，一边安慰着：“好好地睡吧，孩子！没有人叫你。”

“不，我听到有人在很远，又像很近的地方叫着我的名字！不信你听，爸爸！”老人果然也迷茫地耸起耳朵，向太空谛听。

“没有呀，那是教堂的钟声，孩子，你听错了！”

“你才听错了咧，爸爸！明明有人在叫‘灿’，你再仔细听听看！”灿固执地坚信着，并要推开窗子去瞧个明白。老人以为她是烧糊涂了，惶恐地喊了大夫来给她安眠药吃，强迫她又入了梦乡。

第二天的早上，灿一睁开惺松的眼睛，就看见床头站着一个熟悉而又亲切的人。她不禁怔了怔，然后揉揉她那双乌黑的眸子，再定神地注视着。“灿！”又是昨夜的呼声！

灿恍然地笑了起来，两手抓住了她已经认出的人，眶内闪着泪光！“灿，我找得你好苦呵！我的腿快跑断了，我的喉咙喉咙也快喊哑了！”

“我听见了！我听见了！”灿狂热地吻着她紧握着的手。

“你听见了？你不是不在家吗？”

“是的。我就在这里听见的，这里离我家不太远。要不，就是圣母把你的声音从风里带到我的耳边！好几次，我在梦中被你幻醒，我告诉我的父亲，他不信！噢，爸爸，你现在该信了吧？就是他在叫我！”灿说着向老人胜利地微笑。

“你对了，孩子，刚刚我回家的时候，邵先生还在叫你，据他说一夜都没有住声。”老人有些抱歉的样子。

“真的吗？环？那你不是一夜没睡觉么？”

“岂止‘一夜’？从你走后，我已经许多夜不曾闭过眼了！”邵环坐在床沿上，脸上的喜悦掩没了疲惫。兴奋地继续说：“总算我又找到你了，找到你了！”

“什么时候来上海的？”

“昨天下午。”

“你家里知道吗？”

“没告诉他们。”

“为什么？”

“我已经顾不了许多！”

“你勇敢了！”

“爱的力量！”他们拥抱了！心贴着心，灵魂吻着灵魂！老人悄悄走出去，感动地叹了口气！

“你病了？”

“是的。离开你，是一个严重的痛苦；看见父亲又是一个太大的快乐；两种极端的感情刺激，我经不起！因此，到了上海就病倒了，父亲为了治疗方便，把我送到这所教堂的医院里来。环，现在我觉得已经好啦！明天我就可以起床了。”灿说着，振奋地用手掳开两望披散的长发。

“上帝保佑你永远地健康，永远地像一枝雪山上的红梅，孤高而芬芳！”环神往地沉吟着。

“上帝也保佑你永远地年青，永远像伴侍红梅的翠竹，坚强而儒雅！”灿的两颊袭上了一层温情的微笑。

有二十多个黄昏，那铺满了梧桐落叶的马斯南路上，经常徜徉着一双俪影，男的穿一身藏青色的西装，女的穿一件绛紫色的旗袍。遇到有月亮的夜晚，俨然是一片雪光，普照成银色的大地，一枝红梅倚着一杆翠竹，天然地构成了一幅美丽的冬景图。

“你真的健康了！”

“你也真的年青了！”他们彼此颂扬着，踏着落叶，蹒跚在暮秋的斜阳里。忽然，灿想起什么，止步在一排梧桐的尽头。

“不过，我总担心，有一天我又会病起来，你又会老起来。”

“为什么呢？”邵环转动着疑问的眼珠儿。

“因为那些足以伤害我健康的，和阻碍你年青的细菌都还存在，而且也许还正蔓延着。”灿的声音有些忧郁。

“不要想那么多，灿！横竖我已经决心什么都放弃了，临走的时候，我把教授的聘书退还学校，并且附去辞呈。我把所有的薪金也都留给家了，还有这些年来的书物，以及故乡的一点祖产的契约，全部在妻的手里，我估计她和孩子的生活绝无问题，他们可以回到故乡去安居。我对他们已经尽了我的责任。”邵环沉着而坚定地说。表示胸有成竹的样子。

“你认为这样就解决了问题吗？你以为这样就算放弃了他们，他们也放弃了 you 吗？不会的，环！他们可以什么都不要，只要你！他们不会轻轻放弃妻、儿的权利！书物和祖产都不能够满足他们！除非形式上你永远属于他们，实际上你也永远为他们尽责任。”

“我没有卖给他们。”邵环不服地辩驳着。

“可是法律将你卖给他们了。”

“法律的职责是帮助人们幸福，我不爱妻，法律不能强迫我忍受永劫不复的痛苦！”

“法律容许离婚！”

“她不肯，她拿赡养费要挟我，而我没有钱。”

“因此，眼前就要发生不幸！”

“我不愿考虑这些。让我们想法子逃到遥远遥远的地方去，找一个清静的住处，我著书；你作画；与清风为友；与明月作伴；任天塌地陷；我们的爱情永生！”

“假如有一天你的理性苏醒，你会懊悔的。”

“为什么你还这样不信任我？”

“因为一个中年人的感情，本质是世故的，偶然的天真，不可能持久！即如你不爱你的妻，可你会爱你的孩子！”

“不要说这些，我明白，灿！将懊悔的不是我，是你！因为你不甘于为我牺牲你的名誉；你的地位；以及你的青春！你需要一个很理想而美满的婚姻，和我在一起，你觉得是一种耻辱，苟合。所以你矛盾。”

“我不否认，我有‘矛盾’，但这矛盾不是你想的那么简单，这矛盾包含了情感与理智，自私与道德的种种错综的关系！我可以克服这矛盾的心理，不过你未必可以克服那矛盾的现实。”

因为我们是活在现实里的，现实会不断地折磨我们！除非我们一块儿去跳江，才能逃避现实，才能克服矛盾。”

“……”邵环不再言语了。他的心随着斜阳沉下去！落叶打着他的脚，使他感到犹如一块块石头障碍着他的行进，他踟蹰在十字路口了，他该怎么办呢？

一个细雨淅沥的早晨，邵环接到朋友转来妻的电报，通知他：明天就到上海。于是依然象离开重庆时的心情一样，他毫不思索地立刻去找着灿。

“答应我，明天跟我一道离开上海！”邵环武断地说。

“哪里去？”

“先到北平，然后再继续展开我们海阔天空的旅行。”

“……”灿沉默不置可否。她从邵环的脸色上，看出她先前所料到的不幸已经来临了！

“一言为定，我去交涉飞机票，晚上来看你。”邵环不容犹豫地说罢就走了。灿也不暇考虑地悄悄决定了自己的路。

又是秋风萧瑟，又是夜阑人静；又是孤鸿哀鸣无反应；又是杜鹃啼血空自悲嗟！孤立在黑暗里的楼房，上了锁，细雨象征了爱神的眼泪！“灿！灿！灿！灿！”

圣母黯然！教堂的钟声忧愁地回答着：“她已经走了！她向大自然的境界去寻觅春的消息，她把她的生命献出了至高无上的艺术了！”“灿——”邵环倒在泥泞中，落叶寂寞地埋葬了他的灵魂！

三十六年于春申江上

□□□□□